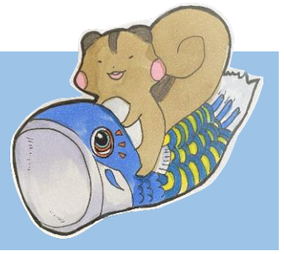
# くるみだより Vol.12

## ことばを育むかかわり方とは



**はじめに**

前回は、言葉が言えるようになるまでの流れを「ことばのビル」という図式で解説しました。
今回は、言葉の学習とコミュニケーションを促す「インリアル・アプローチ」と呼ばれる技法について解説します。

**インリアルをはじめる前の基本姿勢（SOUL）**

**(S)ilece： 静かに見守る**

最初、子どもがその場面に慣れて、自ら行動が始められるまで、大人は自分の考えや意図を押し付けるのではなく、子どもの様子を**「静かに見守り」**ます。

**(O)bservation： よく観察すること**

静かに見守りながら、子どもが何をどのようにするのかを**「よく観察」**します。単にコミュニケーション能力だけではなく、情緒・社会性・認知・運動などについて、子どもの能力や状態を観察します。

**(U)nderstanding： 深く理解すること**

観察し、感じたことから、子どものコミュニケーションの問題について**「深く理解」**し、子どもに何が援助できるか考えます。

**(L)istening： 耳を傾けること**

子どもの声に対して**「耳を傾け」**ます。それは単に耳に入ってくる音だけではなく、子どもの出す様々なサインを全身で感じ取っていくことが必要です。

## インリアル（INREAL）・アプローチによる7つの言語心理学的技法

**模倣しよう（子どもが起こす身振りや音声を大人が鏡のようにマネする）**

子どもは、はじめのうちは自分の動きや発声が他者から注目され、他者に影響を与えることに気付きません。
大人が模倣することによって、コミュニケーションの存在に気付かせるのがインリアルのはじめのステップです。

**1. ミラリング（子どもの行動をそのままねる）**

ミラリングは、子どもの動きを鏡のように大人がまねをすることで、自分の動きが他者に与える効果や意味について気付かせます。（例）子どもが指さしたら同じように大人も指をさします。

**2. モニタリング（子どもの発した声をそのままマネする）**

ミラリングと同様に子どもの声をそのままマネします。自分の発した声が他者にも影響を与えることに気付かせること。子どもの気持ちに大人が共感していることを伝えます。
自分に共感してもらえると子どもはもっと言葉を発しようとします。コミュニケーションの意欲が芽生えはじめます。
（例1）子どもが指をさして「あー」と発声したら、大人も指をさして「あー」と言います。
（例2）子どもが犬を見て「わんわん」と言ったら、大人も「わんわんね」と言います。

**言語化しよう（行動や気持ちを言葉にして添える）**

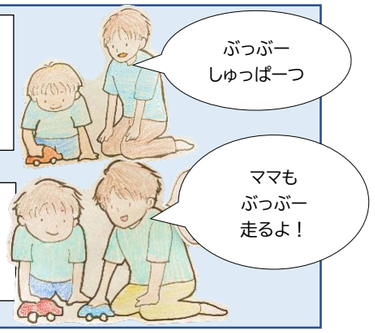
物に名前があるように、日常の動きや気持ちにもそれを表す言葉があります。言葉を覚えるとは、音と意味と結びつけるということです。インリアルでは人と人の間での言葉、つまりコミュニケーション場面で言葉を学習しようという狙いがあります。

**3. パラレル・トーク（子どもの行動や気持ちを言葉にして添える）**

大人は子どもの気持ちを理解して、コミュニケーションのきっかけになる言葉を言ってあげます。（例）子どもが黙って車を走らせているとき、大人が「ぶっぶー、しゅっぱーつ！」と言葉を添える。

**4. セルフ・トーク（大人自身の行動や気持ちを言葉にして添える）**

今度は大人自身の行動や気持ちを言葉にして添えます。
（例）大人が車を走らせながら「ママ（パパ）もぶっぶー、走るよ！」と言葉を添える。




**拡大しよう（新たな言葉を覚える。覚えた言葉の意味を広げる）**

もう少し言葉が増えてくると、子どもの発した言葉に応じて、大人は正しい言い方や新しい言葉に意味を付け加えて返します。

**5. リフレクティング（子どもの発音、意味、文法、使い方等様々な言葉の言い誤りに対して、正しく言い直して返す）**

正しい言葉のモデルを聞かせることで、子どものコミュニケーションの意欲を損なわせずに、聴覚的フィードバックを適切にし、自然に正しい言葉の修正を促す。
（例）子どもの「（ひ）こーき」に対し、「違うよ」否定することなく、「ひこうきだね」と返す。

**6. エキスパンション（子どもの言った言葉を意味的あるいは文法的に広げて返す）**

一語文の子どもでは、二語文に広げて返すことによって、自分の発話の内容や意図を大人が理解していることを示し、発話意欲を促す。同時にその表現によって意味的・文法的モデルを示すことで、高度なことばの学習を促す。
（例）子どもがぬいぐるみを抱いて「わんわん」と言った言葉に対し、「わんわん、だっこ（した）ね」と返す。

**7. モデリング（話題に沿いながら、子どもの使うべき行動や新しい言葉のモデルを示す）**

会話ややりとりを通じて役割交替や言葉の使い方、対話の進め方等についてモデルを示す。
（例）子どもが指さして「ケーキ」とだけ言った時に「ケーキあるね、ケーキ食べようね」と言葉をかける。

＜ 参考 ＞
2002.7 鹿児島県総合教育センター「子どもの言葉を豊かに育てるインリアル・アプローチ」
2012.12.15 株式会社 医学書院 藤田郁代「標準言語発達障害学 言語発達障害学」